＜動向＞

「関学ヒューマンライブラリー 2022」開催報告
――「当事者」たちの物語を「読む」ことの楽しさと大切さ――

宮崎　聡子・阿部　潔

「関学ヒューマンライブラリー 2022」を 11 月 11 日（金）の 17:00 から 19:00 の時間帯にわたり、関学会館「風の間」で開催した。本企画は人権教育研究室主催／日本語教育センター共催という部局間での協働で行われた。当日の参加者は、語り手（「本」）6 名、来場者（「読者」）17 名、スタッフ（「司書」）11 名の合計 34 名であった。開催までの経緯と、当日のヒューマンライブラリーの様子を以下に報告する。

1.「ヒューマンライブラリー」とは

「ヒューマンライブラリー」（以下 HL と表記）とは、2000 年にデンマークの NGO が音楽祭で始めた「人を貸し出す図書館」とも言われる対話型イベントである。「図書館」になぞらえた場で、障害者、ホームレス、性的少数者など、さまざまな人が「本（語り手）」となり、「読者（聞き手）」と 30 分の対話を行う。差別や偏見の低減に資する取り組みとして、また多文化共生のコミュニティづくりの手段として、現在では世界 90 か国以上で開催されており、日本においても全国各地の大学、学校、企業、市民団体による活動が広がっている。本学においても、2017 年 3 月に人間福祉学部研究会主催、精神保健福祉援助実習履修生の企画・運営により、アンチ・スティグマを目的としたヒューマンライブラリーが開催されている。

2. 日本語教育のなかでの HL との出会い

今回の HL 開催のきっかけとなったのは、2022 年 2 月の「関西学院大学日本語教育研究会」において、HL が取り上げられたことである。そこでは、プロジェクト型授業における HL の実践報告（筆者宮崎による）と、HL 体験会が行われた。HL 体験会は、「ヒューマンライブラリ Nagasaki」の協力を得てオンラインで行われた。オンラインではあったが、義足生活者、性的少数者、発達障害のある人などさまざまな「本」の語りを少人数で聴き、対話するという経験を日本語教育センターの教員で共有することができた。この経験から、HL が関学の目指す人権に関わる理念と非常に親和性が高いという実感を得て、次は自分たち自身が企画・運営を担う「司書」となり、関学においても全学的なイベントとして開催してみたいという声が上がった。

このように具体的教育実践を通して湧き上がった、関学での HL 開催に向けた思いと熱意を実現するべく、これまで本学で「人権」をめぐるさまざまな取り組みに従事してきた人権教育研究室との協働の可能性が模索されることになったのである。

3. 関学での HL 実現に向けて

上記の体験会に参加した日本語教育センターのメンバーを中心に、関学で是非とも HL を開催したいとの思いを共にする有志によって、「関学

ヒューマンライブラリー 2022」の実現に向けたワーキンググループが形成された。今回の企画目的は、「学生や教職員が、普段あまりふれあうことのない多様な人々から直接話を聞き、対話することを通じて、それぞれの価値観や文化的背景を知り、自分の中にある固定観念や誤解に気づいたり考えたりする機会とすること」とした。定期的な会合を重ねる中で、それぞれが「本」として来てもらいたい／話を是非とも聴きたい候補者をピックアップしていき、さまざまな「当事者」との出会いを提供できることを念頭に「本」の選定を進めた。その結果、今回は 6 名の本の方にお願いすることになった。その内訳は、「トランスジェンダーの元ダンサー」「なりゆきで共生探求に出た旅人」「ベトナム人の司法通訳士／ベトナム人支援者／大学院生」「ビッグイシュー販売員」「白血病サバイバー」「在日朝鮮人学生」の方々である。どの「本」のストーリーもそれぞれの方のこれまでの人生での経験を反映したものであり、その物語を聴くことで同日集まった「読者」は多くのことを感じ考えることが期待された。

「本」の確定後には、来場者に配布する「ブックリスト」に掲載する各「本」の紹介文（あらすじ）を、各担当者がご本人と相談しながら作成した。また、会場の選定、ポスター・チラシの作成、利用規約や参加者への同意書作成などの準備を行った。その過程で、誰もが参加しやすい環境を整えるために、総合支援センター・キャンパス自立支援室にも協力を仰いだ。その結果、聴覚障害のある学生が読者として参加することを想定し、パソコンテイクによる情報保障が行えることになった。このことは、授業や講演以外の小規模な学内イベントでの情報保障の可能性や、合理的配慮のあり方について考える機会となった。さらに国際学部の教員もスタッフに加わり、広報物の多言語化の提案などを得ることができた。このように準備過程で複数部署間の協働が広がっていったことは、今後本学での「人権」をめぐるさまざまな課題に部局間の協働を通して取り組むうえで、貴重な経験になったと思われる。

４．開催当日の様子

開催当日は、本学の学生・教職員だけでなく「本」とつながりのある方も足を運んでくださり、多様な人びとを迎えての HL の開催が果たされた。30 分間のセッションを 2 回設定して実施したが、それぞれの「本」の方たちが自らの体験を踏まえて語るストーリーに読者たちは魅了され、少人数（各テーブル最大 5 名）のセッションならではの濃密な対話の場を堪能していた。人権をテーマにした講演会や講習会に大きな意義があることはあらためて言うまでもないが、大学と人権教育研究室が取り組んできたそうした取り組みに加えて、より参加型・対話指向のかたちで人権について考える機会を提供することができる HL ならではの意義が、多くの参加者に体感されていたように思われる。

当日の進行・運営面では、日本語教育センター教員と国際学部教員の合わせて 11 名が「司書」となり、受付、司会・進行、各テーブルでの見守りなどを行った。もっとも重要だったことは、対話のセッション中に「本」を傷つけるような言動が起こらないようにすること、またそれが起こった場合は速やかに対応するという場の安全管理であったが、参加者全員の協力により問題はなかった。全体を通じて、「本」・「読者」・「司書」の三者それぞれが、互いを尊重し合いながら対話を楽しむ場を協力して創っているという実感が得られた。このような HL の持つ力を再確認できたことは、今後にとっての大切な成果であった。

５．今後の HL への取り組みに向けて

今回、関学キャンパスにおいて HL を開催できたことには、大きな意義があった。来場者を対象に実施したアンケートの結果からも、今回のイベントへの共感と評価、さらに来年度以降の開催に対する期待が寄せられた。こうした成果と反応を受けて、次年度以降も継続的に「関学ヒューマン

ライブラリー」を企画・実施することが必要だと考える。今後、本企画に期待されるのは、「読者」参加の学生が増え、学生自身が「本」となり自己を語ったり、また「司書」となり HL の企画・運営の段階から関わるなどして、学生達の成長の場となるようなイベントとして育っていくことである。HL は、そこに関わるすべての人に多くの気づきや変化をもたらしてくれるものであり、何よりそこに「楽しさ」がある。そのことを伝えながら、本学での「人権」に関するさまざまな企画・事業との連携も見据え、他部局との緊密な連携のもとで HL を「関学らしい」内容とかたちでより一層充実したものへと高めていくことが、わたしたち関係者に課された責務だと考えている。

参考文献

坪井健･横田雅弘･工藤和弘編著（2018）『ヒューマンライブラリー　多様性を育む「人を貸し出す図書館」の実践と研究』明石書店

松岡克尚（2018）「ヒューマンライブラリー」報告 ,『Human Welfare : HW』巻 10 号 1, 人間福祉学部研究会 ,pp.173-179.

謝辞

今回のヒューマンライブラリーに「本」として快くご登壇くださった 6 名の方々に深く感謝いたします。また、体験会企画から本イベント開催までご協力・ご助言を賜った「ヒューマンライブラリ Nagasaki」代表宮崎聖乃氏に厚く御礼申し上げます。